

# 現代日本語の研究と教育

## ——学会発表内容の還元と活用——

林 伸 一

### 1、はじめに

研究と教育は車の両輪にたとえられ、どちらか一方に偏ることなくバランスよく力を注ぐべきだと言われてきた。だが、大学の教員は研究論文の数で、採用や昇進などの評価がなされてきたために、どうしても教育面がおろそかにされる傾向にあったと言えるだろう。最近になって、ようやく共通教育の担当や留学生の指導、社会人受け入れのための開放授業などの教育面での積極性が評価されるようになり、それが研究費にわずかながら反映されるようになってきた。しかし、研究と教育の連関については、個々人に任されたままで、あるべき教育と研究の関係性を問うパラダイムについての検討は、いまだ立ち遅れているのが現状であろう。

従来の学会発表は、研究者が日頃の研究内容をまとめて、学会という公的な場で口頭発表あるいは論文投稿の形で、成果を公表するというものであった。現在もなお、その位置づけは変わらないと思われる。ただし、山口大学人文学部国語国文学会のように教育研究機関内に設置された学会（いわば学内学会）の場合には、国際的、全国的あるいは地域的な学会とは、その性格と果たすべき役割を異にするとと思われる。

ここでは、主として山口大学人文学部国語国文学会との関連で、現代日本語の研究と教育の関係性を論じたい。その中から学会発表内容の教育現場への還元策と活用方法について考えたい。

### 2、従来の研究発表

山口大学人文学部国語国文学会（以下、学内学会）の従来の研究発表は、主として教員や卒業生、大学院修了者の研究発表の場として活用されてきたように思われる。いわば研究成果の一定のゴールとしての発表の場としての位置づけがなされていたと言えるであろう。ある研究テーマの到達点としての論文を発表する場が、学会であるという位置づけで、いわば成果主義の色彩が強かったのではないだろうか。大学の学部生が学会で発表するというのは無理があるとしても、大学院生が発表しなくても指導教員から内容が不十分で未熟であると言われ、なかなか発表させてもらえないという場合もあったようである。

ただし、大学院生の場合、いったんは卒業研究というプロセスを経ているために、修士論文の制作過程において、学内外の学会というフィルターを通して、修士論文のレベルを上げていくことが可能となる。

以下の表1に山口大学人文学部国語国文学会の執筆状況をまとめて示したい。教員とあるのは、山口大学の教員のみならず他大学・短大の非常勤講師以上の教育スタッフを指す。卒業生とあるのは、学部卒業生を指し、中学・高等学校等の教諭である場合を含む。大学院とあるのは、

修士以上の大学院生を指し、( ) 内にその修了生を外数として示す。文学とあるのは、文学関係の内容の論文を指し、語学とあるのは、日本語学関係の論文をさす。語学関係の論文の内、現代日本語関係のものを( ) で内数として示す。

表1 山口大学人文学部国語国文学会の執筆状況

号	発行年	教員	卒業生	大学院	文学	語学	論文数	総頁数	備考
1	1978	3	3	0	5	1 (0)	6	70	創刊号
2	1979	5	6	1	7	5 (2)	12	134	関守追悼号
3	1980	2	2	0	2	2 (1)	4	78	
4	1981	4	5	0	5	4 (1)	9	104	小野追悼号
5	1982	1	3	1	2	3 (1)	5	56	
6	1983	1	5	1	4	3 (0)	7	100	
7	1984	1	3	2	4	2 (0)	6	76	
8	1985	1	6	0	5	2 (0)	7	92	
9	1986	1	5	0	3	3 (1)	6	78	(注1)
10	1987	2	4	4	8	2 (1)	10	146	
11	1988	1	3	3	3	4 (1)	7	90	
12	1989	3	5	0	6	2 (0)	8	112	
13	1990	1	4	1 (2)	5	3 (0)	8	120	
14	1991	8	6	1	10	5 (2)	15	148	(注2)
15	1992	4	5	3	7	5 (1)	12	160	(注3)
16	1993	6	5	2	10	3 (1)	13	156	(注4)
17	1994	3	3	2	5	3 (0)	8	116	(注5)
18	1995	2	1	4	7	2 (1)	9	126	
19	1996	2	2	4	5	3 (1)	8	114	
20	1997	5	1	1	6	1 (0)	7	103	
21	1998	6	4	3	6	6 (1)	12	151	関退官号
22	1999	5	2	1	5	2 (1)	7	94	(注6)
23	2000	4	2	4	5	4 (2)	9	130	
24	2001	9	0	5	8	4 (2)	12	169	石井退官号
25	2002	3	1	3	2	5 (3)	7	100	
26	2003	5	2	3 (1)	6	5 (4)	11	168	
27	2004	4	1	3 (1)	3	6 (5)	9	122	石井追悼号
28	2005	3	0	4 (2)	2	6 (4)	8	120	
29	2006	2	2	2 (4)	7	3 (2)	10	158	水本追悼
30	2007	2	2	3 (3)	5	5 (4)	10	144	
31	2008	3	1	2 (2)	4	4 (4)	8	139	
合計		102	94	63 (15)	162	108 (46)	270	3674	
比率		37.2	34.3	28.5	60.0	40.0	100	—	—

- (注1) 語学3本の内訳は、「-OHP利用による-国語Ⅰの漢文指導」や「聾学校における国語教育」など教育現場の実践報告が2本含まれている。
- (注2) 第14号は、「国文学」「国語学」「国語教育」と論文が目次のレベルで区分されているが、「国語教育」1本は語学系の論文としてカウントした。
- (注3) 第15号は、「国文学」「国語学」が目次レベルで線により区分されていて、「国語教育」1本が別格に表示されているが、語学系の論文（現代日本語）としてカウントした。
- (注4) 第16号は、再び「国文学」「国語学」「国語教育」と論文が目次のレベルで区分されているが、「国語教育」2本の内1本は文学系、もう1本は語学系の論文として数えた。
- (注5) 第17号からは、「国文学」「国語学」「国語教育」と論文が目次のレベルで区分されることはなくなり、号によって線または記号による区分する形となっている。
- (注6) 第22号は、「横光利一『上海』をめぐって」というシンポジウム報告が連名で掲載されたが、文学系の論文1本としてカウントした。それ以降も同様の扱いとした。

表1に示したように、全体論文数のうち文学系と語学系の比率は、6割対4割となっている。語学系の論文の中で現代日本語研究の割合は、42.6%となっている。現代日本語研究の全体論文数に占める割合は、16.8%と少ないのが現状である。

### 3、プロセス主義の発表

学内学会では、ある研究テーマについての研究成果を公表する到達点としての位置づけだけでなく、研究プロセスそのものを公表するプロセス主義の立場の位置づけがあってもいいのではないだろうか。そのプロセス主義の立場から、学内学会発表のパラダイム転換を提案したい。

新しいパラダイム (paradigm) とは、<発見し、はぐくみ、形にする 知の広場>という山口大学における基本理念に沿っているとも言える。自分なりの研究テーマを発見し、そのテーマについて様々な方法を用いて、データを収集し、様々な観点から検討を加え、論文の形にまとめ上げていくプロセスに寄与するのが、山口大学という<知の広場>であり、山口大学人文学部国語国文学会という<学内学会>であると思われる。以下に具体例を示しながら、プロセス主義の発表と発展の事例を見ていきたい。

- (a) 日本語と中国語の同形語「先生」について—マインドマップ調査による意味機能分析—陳仲鵬が2008年の5月の学会で口頭発表（以下、陳論文）
- (b) 日本語の新語に見る日本事情—「オタク」関連語を中心に—韓飛が2008年の5月の学会で口頭発表（以下、韓論文）

#### 3-1、学会発表内容の授業への還元（陳論文）

陳論文は、夏休み中の4回ほどの加筆修正を経て、2008年10月6日の日本語学講読の時間に、論文の内容を発表し、受講学生同士が二人一組になり、ペア・ワーク (pair-work) 形式で検討を加えた。受講者は35名（男性3名、女性32名）であった。そこから出てきた声を「質問・感想カード」の中から談話データとして抜き出して、以下に談話分析として示す。個人情報保護の観点から、書き手の実名は使用せず、任意の小文字アルファベットをもって示す。

## 3-1-1 中国語との関連で「興味深い」との感想

- a : 日本語と中国語を繋ぐテーマであり、とても興味深いものであったと思います。「先生」という言葉が中国語にあるのは知っていましたが、日本語における「先生」との微妙な違いを深く知ることができて楽しかったです。また、違いだけでなく、意味の重なった部分もあり、やはり漢字は中国から伝来したのだということを実感しました。(三年、女性)
- b : 中国語を2年の前期まで学んでいたし、中国語は結構好きなので、今回の陳さんの論文はとても興味深かったです。(二年、女性)
- c : 今日は「先生」についての論文を読み、テーマは違っても、自分の論文を書くために参考になることがいくつもありました。名前を呼ぶだけで中国ではあいさつになるというのが簡単で良いなと思いました。(二年、女性)
- d : 陳さんの論文は、中国語交じりで書かれているので、少しわかりにくい部分もありましたが、日本語と中国語で、同じ「先生」でも異なった義があることがわかって興味深かったです。(二年、女性)
- e : 中国語と日本語の比較なので、仕方のないことかもしれませんが、中国語とそれに相当する日本語が、カッコで書かれているので、カッコが沢山あって、少し見にくいという話が出ました。また、色んな意味があるのに、中国も日本も「先生」という同じ字を使うのは面白いという話でもでした。(二年、女性)

上記のように、陳論文は中国語との関連で「興味深い」との感想が多く見られた。日本語の特徴は、日本語だけを見てはわからない面もあり、ここでは中国語という鏡を通して、日本語と中国語の「先生」の相違点に気づくという教育的な効果があったと思われる。日本語学講読の授業は、日本語文化論コースの学生だけでなく、中国語文化論コースや言語情報論コースの学生も受講しており、日本語学・日本文学コース（日本語文化論コースの新名称）の所属ゼミが決まっていない二年生も受講している。幅広い興味と関心を持っている学生のさらなる興味を喚起し、面白く楽しいと思わせる授業の題材として陳論文を用いたことは、適切であったと思われる。

上記eの「カッコが沢山あって、少し見にくい」との声は、日本語と中国語で同形語の「先生」の相違点を記述する都合上、日本語の場合は「先生」、中国語の場合は〈先生〉と記号により区別したためである。陳論文に引用された荒川清秀（1979）が「中国語と漢語」（『愛知大学文学論叢』愛知大学文学会）で用いた記号の使い分けであり、言語の質的研究のためには、共通のサイン（記号）を用いる必要があるとの判断から用いられた。

## 3-1-2 「発見」と「驚き」

- f : 陳さんの論文で、同じ漢字でも、中国と日本では意味が違ったり、意味範囲が違ったりするので、驚きました。(二年、女性)
- g : 私は中国語を取っていましたが、隣の人は日本語の先生 ≠ 中国語の先生ということに驚いていました。(二年、女性)

- h : <先生>における中国での使い方は、いろいろな意味があるのだと驚きました。  
日本の「こんにちは」のような使われ方もするのは面白いと思いました。言葉は人間が使うため、多くの意味で用いられるのだろうと感じました。(三年、女性)
- i : 中国語を学んだことがなく、それに関する知識もほとんどなかった為、<先生>が男しか指さない、さらには「夫」の意味をさすことを知りおどろいた。(二年、女性)
- j : 私は中国語にとっても興味があつて、前期は中国語の授業をたくさんっていました。  
<先生>という意味が、日本語で使う「先生」とは少し違う意味があるというのは、知っていましたが、こんなに多くあるとは思いませんでした。(二年、女性)
- k : <先生>に「夫」としての意味があるとは驚きました。(二年、女性)
- l : 「先生」という言葉が日本と中国で意味が違うということも驚きだったが、同じ意味としても多く用いられているということも同じくらい驚きだった。(二年、女性)

上記のように「発見」と「驚き」が多く記述されており、ただ一方的な情報・知識の伝達だけでは感動は少ないが、発見の喜びと驚きを共有することにより、学習の動機付け (motivation) が促進されると思われる。

上記 f のように「同じ漢字でも中国と日本では意味が違ったり、意味範囲が違ったりする」ことに関する驚きは、上記も表明しており、次回の授業では金若静著『同じ漢字でも—これだけ違う日本語と中国語—』(学生社) や上野恵司著『中英日韓対照・分類中国語基本語彙』(白帝社) などの参考文献を授業で提示し、閲覧することができるようにした。前者には「老師」という見出し項目はあるが、「先生」はない。後者には、中国語の<先生>の項に gentleman, sir との英語訳と「先生; ~さん」との日本語訳が示されている。また、中国語の<教師>の項に teacher との英語訳と「教師」との日本語訳が示されている。同じく、中国語の<老師>の項に teacher との英語訳と「先生」との日本語訳が示されている。

その他にも、飛田良文・呂玉新 (1987) の『日本語・中国語意味対照辞典』(南雲堂) もあるが、「先生」あるいは「老子」を見出し語とする記述は含まれていない。

上記 l の「先生」という言葉が日本と中国で意味が違うということも驚きだったが、同じ意味としても多く用いられているということも同じくらい驚きだったというのは、論文作成者の陳仲鵬の驚きでもある。陳仲鵬は、中国語の<先生>と日本語の「先生」とは、同形異義語であるとの発想から調査を開始したのだが、調査が進むにつれて予想以上に同義の部分があり、発表タイトルも同形異義語から同形語に変更したといういきさつもある。

### 3-1-3 学習の動機付け (motivation)

- m : 陳仲鵬さんの修士論文を読んで、私も早く自分自身の卒業論文の研究テーマを決めなければならぬと思いました。(二年、女性)
- i : 留学生の方は日本語も中国語も話せるのに、私は中国語が一つも分からず、少しくやしかったです。(二年、女性)
- n : 中国語で発音を頭に思い浮かべたものと、陳さんが実際に話した発音とで違うものがいくつかあったので、勉強しなくてはなあ…と思いました。(三年、女性)

- k : 今一つ理解ができていないので、家でもう一度じっくり読もうと思います。(二年、女性)
- o : 中国で「先生」という言葉が生まれたのは、「先に生まれた人で、知識や経験がある」というイメージからである、というのは儒教的な考え方だと感じた。日本では、医者や教師だけでなく、政治家なども「先生」と呼ぶが、中国ではどうなのか論文を読んでみたい。(二年、女性)
- p : 「古代中国において〈先生〉は(中略)『教師』を指す言葉として使われていた」という一文を見て、元々の意味は現在の日本語と同じだったんだな—と思ったし、隣の人が、それについて『儒教的』?とっていて、なるほどと思いました。日本語での「先生」に比べて、中国語の〈先生〉は意味範囲がととても広いなと感じました。(三年、女性)
- q : 中国語を今まで学んだことがなかったため、今日読んだ内容で、初めて知った中国語が多くありました。これから少し中国語についても学んで行きたいと思います。(二年、女性)

大学院生と学部生という差はあるものの、ほぼ等身大の論文に接することで、上記mのように学部二年生であっても、自分も「早く自分自身の卒業論文の研究テーマを決めなければならない」と思うようである。教員が「早く卒業論文の研究テーマを決めてください」と言っても、いずれそのうちにと聞き流す学生が多い中で、いい意味でのピア・プレッシャー(仲間からの精神的圧力)としての刺激を受けて、より能動的な姿勢に転ずるようである。

放っておくと三年生の後半になっても、四年生になっても「いえいえ、まだまだ…」と研究テーマの自己決定を先延ばしする学生がいる。四年生だけを切り離して卒業論文指導をすると二年生と三年生には、卒論作成の喜びや苦しさが伝わらないように思われる。

また、上記iが「留学生の方は日本語も中国語も話せるのに、私は中国語が一つも分からず、少しくやしかった」という気持ちは、上記nの中国語を「勉強しなくてはなあ…」という思いにつながり、上記qの「今日読んだ内容で、初めて知った中国語が多くありました。これから少し中国語についても学んで行きたい」という思いに広がっていく可能性がある。日本語文化論コースと中国語文化論コースの専攻希望者の関係は、過密と過疎といってもいいような不均衡な関係になっているが、興味を喚起できれば不均衡は是正できると思われる。日本語文化論に籍を置きながら、中国の大学に交換留学や語学留学で出かけていく学生がおり、日本語文化論コースと中国語文化論コースの垣根を低くするか取り払うような方策も検討されてしかるべきであると思われる。

なぜ、そのように考え、提案するのかということがかつて次のようなテーマで卒業研究に取り組んだ日本語文化論コースの学生がいたからである。

井上(2000)は、日中同形異義語「料理」について、通時的にも意味変化を調べ、現時点で「料理」という語の日本語と中国語での共時的意味の差異について検討している。井上(2000)は、「日本語と中国語における同形意義の漢語表現について」という卒業研究テーマのもとに「料理」のほかにも「調理」「割烹」などの語も調べている。

また、日高(2005)は、日中同形異義語『勉強』について通時的にさかのぼり、現時点での「勉強」という語の日本語と中国語での共時的意味の差異について検討している。

## 3-1-4 研究方法と論文の書き方について

- k : 論文の書き方についてもよく学びました。(二年、女性)
- q : 今回の授業で、研究論文に間近に触れることで、その書き方を知ることができました。(二年、女性)
- r : 調査方法でマインドマップを使うのが目新しかった。(二年、男性)
- s : 参考文献のページを書くとか、それが分かれば図書館で印刷してもらえとか、表や図の話とか、論文を書くために必要なことなどまで勉強になりました。(二年、女性)
- g : 今日の授業で陳さんの論文を教材として使用しましたが、「表」と「図」の使い方の違い等初めて知ることもあり、とても勉強になりました。(二年、女性)
- h : 陳さんの論文ですが、(1993=1996) や、表1、図1 など、論文の書き方の参考になりました。(二年、女性)

上記 r の「調査方法でマインドマップを使うのが目新しかった」とあるのは、従来のマインドマップ (mind map) が企画書や構想を練る際のメモ、講義録、備忘録などの目的で用いられていたのに対して、陳論文や韓論文では調査方法として用いているからであろう。調査方法としては、本書の許 (2009) 『『日本文化』と『中国文化』のイメージ比較研究』においても、日本人を対象にマインドマップ調査を行なっている。マインドマップとは、1970年代初めにトニー・ブザン (Tony Buzan, 1993=1996) らが提唱した記述法で、「心の地図」の意味である。具体的には、一枚の紙の中心にテーマ (中心概念) を描いて、それに関連するさまざまな情報や発想やアイディアを、枝を伸ばすように、放射線状に次々と書いていく方法である。人間の脳の意味記憶の構造によく適合していると言われ、結果としては意味範囲を示す図になる。

文章で書かれた情報は、言語の線状性 (linearity) から継時 (継次) 処理されることとなるが、マインドマップのように絵画的に展開される情報は、同時処理されやすくなるという特徴がある。

マインドマップは、いわばフロイト (Sigmund Freud 1856-1939) の提唱した自由連想法 (free association method) を紙の上で展開する形となり、連想の連鎖で中心概念から関連の薄い言葉も記載される心配がある。しかし、実際は紙の大きさに規定された制限があるため無限に続く様な連想の広がりには、おのずと制限される。また、関連語を線で結んでいくために関連性の糸をたぐることはできる。自由記述によるアンケート法に近く、質的な研究と量的な研究の両面を追究する可能性がある。

また、マインドマップ上には、ソシュール (Ferdinand de Saussure) の区分した社会的側面である「言語」(langue) だけでなく、個人的な側面である「言」(parole) も書き込まれる場合がある。その場合には、数多くのマインドマップを回収し、共通して出現する語を抽出して分析すれば、社会的な言語性が明らかとなる。出現度数が1のものは、回答者の個人的な「言」(parole) が書き込まれた場合もあり、言語研究としては除外してもいいが、出現度数が1のものの中にも社会的な言語性を表わしている語が含まれている場合もある。

さらに、韓論文のように日本語の中の若者言葉、俗語、流行語などの新語を研究する場合には、辞書に記載されていない語や見出し語として記載されていても語義が派生しているもの、新し

い用例などが収録されていない場合があるので、調査時点での横断的研究にはマインドマップ法が適している。また、表記として「お宅」とするか「オタク」とするかによっても連想するイメージが違ったり、指示対象が異なったり、関連語の広がりや違ったりするので、両者を比較検討するデータを得ることができる。

山本（2008）は、高等学校現場での「コミュニケーション能力を育む国語教室の創造」のために用いた構成的グループ・エンカウンターの実践の一部にマインドマップを用いている。

太田（2008）も「コミュニケーション活動に役立つ構成的グループ・エンカウンターの実践」の中で、マインドマップを用いている。山本（2008）は、修士論文として、太田（2008）は、卒業論文としてまとめたが、学会発表は行っていない。しかし、『エンカウンター研究』第1号という林伸一研究室発行の研究室の論文集に収録され、実践事例を示すことで、後輩へのヒントを与え、その成果を後輩に還元している。

相村（2008）も蘇州日本人学校での実践事例として、マインドマップを用いた作文指導を学会で報告している。教育現場での実践的なアイデアが示されている。

上記sの「参考文献のページを書く」というのは、論文の末尾に参考文献リストを付けるだけではなくて、参考にした論文のページ数をpp.69-79のように書いておくと図書館の複写サービスを利用して、他大学の図書館からでも必要な論文の複写を取り寄せられることを知らせたためだと思われる。

上記gの「表」と「図」の使い方の違いを初めて知ることもあり、とても勉強になりましたとあるのは、「表」のタイトルは「表」の上に書き、「図」のタイトルは、「図」の下に付けることを解説したことによる。普通、横書き論文の場合、「表」(chart)の始まりは「表」(chart)の左上からであり、グラフに代表される「図」(figure)の始まりは、x軸とy軸の交差する0点が左下にくることが多いことから、視線の動きに合わせて「図」のタイトルを「図」の下に付けるという国際的なルールを解説したことによる。

上記hの(1993=1996)とあるのは、「トニー・ブザン (Tony Buzan,1993=1996) らが提唱した記述法」のような引用のしかたのことで、参考文献リストの中には、Tony Buzan & Barry Buzan (1993) 『THE MIND MAP BOOK』 (=1996 『これが驚異のマインドマップ放射思考だ!!』 邦訳 田中孝顕 騎虎書房) のように示されており、原書の発行年と邦訳の発行年をイコールで結んで示した形のことである。原書と邦訳では、訳者によって微妙に原文とニュアンスが異なっていて、一対一対応していない場合もあるが、引用する際には、そのような違いには着目せず、同等の内容であるという前提で取り扱っていることを示すものである。山口大学文学会発行の『山口大学文学会志』にも同様の方式で引用と参考文献が示されている例がある。

### 3-2、学会発表内容の授業への還元（韓論文）

韓論文は、夏休み中の3回ほどの加筆修正を経て、10月3日と10日の日本語学Ⅳの時間に、論文の内容を発表し、受講学生同士が二人一組になり、ペア・ワーク (pair-work) 形式で検討を加えた。受講者は37名（男性7名、女性30名）であった。そこから出てきた声を「質問・感想カード」の中から談話データとして抜き出して、以下に談話分析として示す。個人情報保護



の観点から、書き手の実名は使用せず、任意の大文字アルファベットをもって示す。

まず、認知率としては「オタクカルチャー」より「オタク文化」のほうが高かったというアンケート結果が得られたのに対して、その理由について二人一組のペア・ワークで検討した。以下に参加者のコメントを談話データとして抜き出して示す。

### 3-2-1 「オタクカルチャー」と「オタク文化」について

- A：カルチャーが外来語なので、文化よりも認知率が落ちるのであろう。(二年、男性)
- B：「オタクカルチャー」は、もともと外国に紹介するためにつくられたもので、「日本語＋英語」だから違和感があって、あまりなじみがないのかも、という話が出ました。(三年、女性)
- C：「オタクカルチャー」だと、まず「カルチャー」という意味にピンとこない層の人が40代、50代には多いと思われる。すべてカタカナだと目を背ける人がいるかもしれない。(二年、女性)
- D：「カルチャー」という言葉には、おしゃれな印象があり、そうではない「オタク」との組み合わせに違和感を覚えるとの声があった。このためあまり積極的に使われないのではないだろうか。(三年、男性)
- E：「カルチャー」の語の方が高等なイメージがあります。カルチャースクールなどのように学んで得たものという感じがするので、「文化」という全てのものを大きく含むことができるイメージを持つ「オタク文化」の方が認知されているのではないのでしょうか。(三年、女性)
- F：「オタクカルチャー」は、全部がカタカナなので一目で意味が入ってきにくい。(二年、女性)

上記Aのように「カルチャーが外来語なので、文化よりも認知率が落ちる」あるいは、なじみが薄いとこの語種の違いに着目するコメントが多数見られた。

また上記Bのように「オタクカルチャー」は、外国に紹介するためにつくられた外向きの用語で、「オタク文化」は日本国内の内向きの用語であるとの声も聞かれた。

さらに上記Cのように、まず「カルチャー」という意味にピンとこない人が40代、50代には多いとする年代差を理由にあげる人も多かった。年齢差や男女差を考えるのは、社会言語学的な見方であるが、韓論文では、男女差は見られないことが報告された。

また、上記DやEのように「カルチャー」という言葉にはおしゃれな印象や高等なイメージがあり、どちらかというとき暗い印象の「オタク」との組み合わせに違和感を覚えるとの指摘があった。それは、プラスイメージの語とマイナスイメージの語の合成による違和感とも言える。

上記Fの「オタクカルチャー」は、全部がカタカナなので一目で意味が入ってきにくいとの声とCの「すべてカタカナだと目を背ける人がいるかもしれない」との指摘は、すべてカタカナだと視覚的に合成された語のどこに切れ目があるかが分かりにくくなるという分節性の問題を含んでいる。

次に「マンガ喫茶」と「漫画喫茶」では、前者が後者より認知率が高かったというアンケート結果について、その理由を二人一組で検討した。そのコメントを以下に示す。

## 3-2-2 「マンガ喫茶」と「漫画喫茶」について

- G：カタカナ+漢字という表記の仕方も見やすいことから、マンガ喫茶、オタク文化の方が認知度が高くなったと考えられる。(二年、女性)
- H：「マンガ喫茶」は日常生活の中で目にする機会が多いので、「漫画喫茶」より認知率が高いのではないか。(二年、女性)
- I：「マンガ喫茶」と「漫画喫茶」では、後者がより固いイメージを伴っている。「漫」という字が書けない人もいるかもしれない。さらに言えば、「まんが」とは幼いころに存在を知るものなので、そのときは「マンガ」という字をよく目にする、というより「漫画」という漢字をあまり見ないだろうから、そのイメージが定着して、ということが考えられる。(二年、女性)
- J：画数の多い漫画は普段あまり使わず、マンガをよく使うという理由があるのではないかと思います。(二年、女性)

上記Iの指摘するように、「マンガ喫茶」が表記の面からやわらかく新しいイメージを伴っているのに対して、「漫画喫茶」は、固く古いイメージを伴っていると言えるであろう。確かに画数の多い「漫」という字が書けない人もいる。さらに、「まんが」や「マンガ」は幼いころにその存在を知り、親しむものなので、そのときは「まんが」や「マンガ」というカナ書きの表記をよく目にする。それに対して「漫画」という漢字表記は、後追いつる形で、中学・高校段階で目にするることとなり、カナ書きに比べ、イメージが定着していないということが考えられる。ひらがなから習いはじめ、カタカナ、漢字へと学習段階がすすむという日本の教育事情も関連してくることであり、調査者の韓飛自身も気づかなかった点である。

韓論文のように現代語の中でも、集団語、若者語、俗語、流行語などについての研究は、一般の共通語の研究よりも一段低く見られがちである。現代日本語研究の中でも差別的な扱いをされることが多いが、現時点での少数派言語が次代の多数派言語に変化する可能性もあり、粗略に扱うのではなく、きめ細かい検討が加えられてしかるべきであろう。

## 4、まとめと今後の課題

研究論文は、多くの人の目にさらすことで、誤字脱字が訂正されるだけでなく、自分だけでは気づかなかった不十分な点や論理構成上の弱点、盲点などに気づく契機となり、完成度が上がることが期待できる。いわば「三人寄れば文殊の知恵」を現代の教育の現場に具体化する方策であると思われる。つまり、問題の発題者がいて、それを二人一組で検討し、その検討内容を全体化し、共有化(sharing)するというシステムである。

指導教員の個人的な指導だけでは一対一の範囲内で、それ以上の広がりや期待できないが、ゼミや授業で検討を重ねた上で学会発表すると弱点が補強される。学会発表したのちも、さらにより多くの人に見てもらい、コメントを得ることが、研究内容の発展と前進につながると思われる。冒頭に示した「研究と教育は車の両輪である」との比喩は、このような研究と教育の補完関係、研究と教育の相互作用を意味していると言えるであろう。

教員自身も自分の論文をゼミや授業、研究会や学会の場で、積極的に多くの目にさらすこと

(exposure)を通して、鍛えられていく面があると思われる。研究者としての自己研鑽のためにも学外の学会での口頭発表を通して、異なる視点からの質問や意見に対応する他流試合をしたほうがいい。他流試合は、自らの身を危険にさらす心配もともなうが、外からの刺激を得て、研究上の困難な壁を打ち破る契機ともなりうる。

たとえ論文投稿をして採択されなかった場合でも、レフリーからのコメントに触発されて、次の段階に進む可能性も出てくる。その点では、教育研究者として他者の発表を聴いて新たな知見を得る自己研修・自己研鑽の場としての学会は、重要な教育研究システムとしての機能を有していると言える。

以上見てきたように、学内外の学会には、研究だけでなく教育システムとしての機能も果たしており、今後も大いにその役割を発揮してもらいたいと念願している。学内学会は、ともすると同窓会的な仲よしグループの集まりになりかねないが、よりオープンな姿勢で、学内外会員を増やし、開かれた学会運営が望まれていると思われる。

さらに学会と学会の連携・協力も積極的にすすめられてしかるべきだと思われる。学問の閉鎖性は、学問の衰退につながり、学問の開放性は、学問の進歩発展に貢献すると確信する。

#### 【参考文献】

- 井上範子 (2000) 「日中同形異義語『料理』について」「日中同形異義語『料理』『調理』『割烹』について」全国語学教育学会発行『山口支部研究紀要』第6号 pp.45-56、pp.57-65
- 太田陽子 (2008) 「コミュニケーション活動に役立つ構成的グループ・エンカウンターの実践」山口大学人文学部言語文化学科林伸一研究室発行『エンカウンター研究』第1号
- 韓 飛 (2009) 「日本語の新語に見る日本事情—『オタク』関連語を中心に—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第32号、pp.122-134
- 許 恵玉 (2009) 「『日本文化』と『中国文化』のイメージ比較研究—日本人のマインドマップ調査—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第32号、pp.136-150
- 梶村知美 (2008) 「マインドマップを用いた作文指導—蘇州日本人学校中学3年生クラスでの実践事例—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第31号、pp.84-100
- ソシュールFerdinand de Saussure (1949) 『COURS DE LINGUISTIC GENERALE』(=1972 『一般言語学講義』邦訳 小林英夫 岩波書店)
- 陳 仲鵬 (2009) 「日本語と中国語の同形語『先生』について—マインドマップ調査による意味機能分析—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第32号、pp.152-166
- トニー・ブザンTony Buzan&Barry Buzan (1993) 『THE MIND MAP BOOK』BBC Books (=1996 『これが驚異のマインドマップ放射思考だ!!』邦訳 田中孝顕 騎虎書房)
- 日高奈美 (2005) 「日中同形異義語『勉強』について」全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会発行『山口支部研究紀要』第10号 pp.91-105
- 山本徳子 (2008) 「コミュニケーション能力を育む国語教室の創造」山口大学人文学部言語文化学科林伸一研究室発行『エンカウンター研究』第2号、pp.1-83

(はやし・しんいち)